

ご かん
後漢・185 年

(教科書 66・67 ページ)

概要・特徴



中国・後漢の時代に、敦煌(甘肅省)の名族である曹全の功績をたたえて建てられた碑。後漢の隷書碑を代表する名作の一つである。作者は不明。曹全に仕えた部下や、人物・功績をよく知る人々から贈られた賛辞の言葉で埋め尽くされている。

碑石は、明代末期に発見された。碑主の曹全が失脚し、自身に影響が及ぶことを恐れた立碑の関係者たちによって土中に埋められていたため、破損が少なく、刻された当時の様子を知ることができる。高さは272センチメートル、幅は95センチメートルで、現在は、陝西省の西安碑林博物館に収蔵されている。全文で830文字である。

筆意に富み肉筆のような味わいがあり、扁平な字形や柔軟な点画、伸びやかな波磔など、典型的な隷書の書法を見ることができる。気品のある優美な書である。

曹全について

曹全は、敦煌(甘肅省)の出身で、郃陽県(現在の陝西省)の長官となり、黄巾の乱(張角らによる組織的な農民反乱)を鎮圧した。任地をよく治め、功績を上げたと伝えられる。

時代背景

前漢・後漢は、情報量の増加と使用者の広がりの中で、素早く書ける隷書が発展した時代である。木・竹筒や帛書(文字の書かれた絹布)に残された肉筆の書から、前漢時代の前期には、既に波磔を備えた隷書が書かれていたことがわかる。後期には、華麗な波磔をもつ八分様式が生まれ、篆書に代わる公式書体となった。後漢時代の石刻は、前期から中期までは、波磔を強調しない隷書(古隷)が中心であったが、後期には、八分様式が最盛期を迎え、隷書の典型となった。曹全碑も、典型的な八分隷である。また、この頃には、行書・草書が日常的に使われるようになった。